残虐な抱擁

井上光晴

発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽2-12-21
電話　東京（03)945-1111(大代表)
振替　東京　3930
デザイン　亀倉雄策
製　版　株式会社まゆら美研
印　刷　豊国オフセット株式会社
製　本　有限会社中沢製本

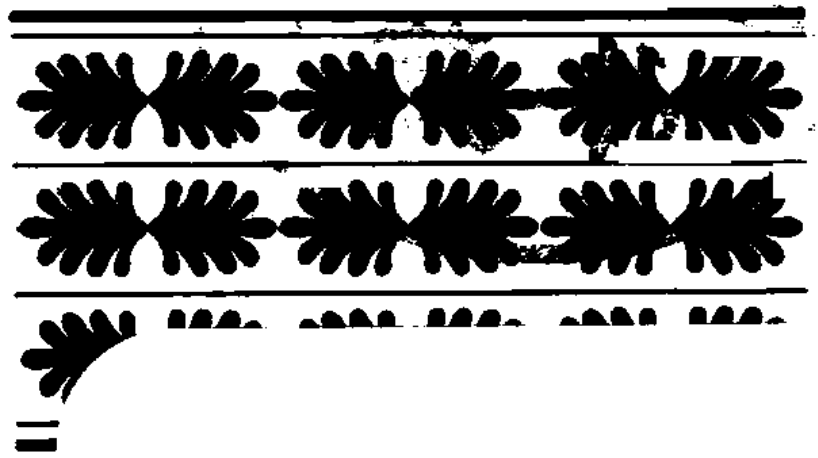
© Mitsuharu Inoue 1974

Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります。
(落丁本・乱丁本はおとりかえします)

残虐な抱擁

井上光晴



目次

残虐な抱擁　松原新一　一六四
解説　五
年譜　一八〇

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

残虐な抱擁

1

彼の厚い唇と痩せた頬のあたりがゆるんだのを、山東治は何年ぶりかで見た。いや何年ぶりかではなく、もしかすると兵隊服を着た彼が町役場の男に付添われて、この海辺の火葬場にあらわれて以来、初めてのことかもしれない。自殺した少年の棺が運び込まれ、それを担ぐ男のひとりが広場の途中でけつまずいた時、彼は確かに口もとに薄い笑いを浮かべた。その表情は忽ち元の濁ったとらえようのない顔に吸い込まれたが、広場を横切る少年の棺を見守りながら、山東治のもう一方の眼は彼の消えた笑いを追っていた。

二人の男に担がれて、少年の棺はだんだんと山東治の方に近づいてくる。遺族らしい人々のなかで、ネクタイをした民生委員がしきりに顔の汗を拭いている。中学に上がったばかりだという少年の死因については、さまざまな噂が流れていたが、とにかく小迎トンネルの上から佐世保行きの気動車目掛けて飛下りたことに間違いなかった。去年の夏、この町に帰省した水産高等学校の学生が、やはり小迎トンネルの附近で自殺とも事故死ともつかぬ死に方をしたことがある。学生と関係していたという噂を頑強に拒否しながら、ついに失踪してしまった人妻の問題を含めて、その事件は今でも執拗で複雑な、黒々とした尾を引いているのだが、なぜ少年が自殺したのか、確かなことは何もわからなかった。

汗を拭く民生委員だけが黒っぽい背広を着ており、棺を担ぐ男たちはまるで河岸工事にでも行くような風体をしていた。二人ともワイシャツの袖を肩のあたりまでまくり上げていたが、色合いはあまりそこからでている腕と違わなかった。町の者ではなかったから恐らく手間賃で雇われたのだろうが、手拭を首に巻いていないだけまだましなようにも思われた。足首がむず痒くなったので、山東治は手をのばしてそこを掻いた。その拍子に横をむくと彼の姿がなかったのだ。山東治は孵化したばかりの青いバッタを投げ捨ててあたりを見廻した。すると焼却場の外れを足早に立ち去ろうとする彼の背中が見えた。山東治は横っ飛びに駈けだして彼の前に立ちふさがった。

「何処に行くつもりかね、今頃になって。もうお棺も着いとるというのに」

彼は山東治の顔を見もせず、ややうつむき加減にぶつぶつと呟いたが、何をいっているのか、はっきりしなかった。

「おかしいじゃないか。自分の仕事をほったらかしちゃいかんよ。選りにも選って……」山東治はいいかけたが、なんとなく不安な気持がかすめたので声の調子を変えた。

「用事があるのなら後のことにしてくれんかね。とにかく、ああしてお棺は着いとるんだし、あんたがいなければにっちもさっちもいかんのだから」

彼は返事もせず、腕時計でも見るように片方の腕を目の前にかざした。そして、手の甲をゆっくりした動作で口のあたりに持って行くと、苦いものでも噛んだように音だけの唾を吐いた。

「どうしたんだ、宰川さん。わけもいわずに自分の仕事を放りだすなんて、あんたらしくないじゃないか。第一、あんたがいなければ、運んできたお棺は誰が焼くのかね」山東治は機嫌をと

るようにいった。仕事に戻れ、と怒鳴りつけてもよかったが、どうしてかそんな口調になったのだ。

「咲子にどうしてもきいておきたいことがあってね」意外にすらすらとした声が宰川美雄の口からでた。「今日までずうっと忘れとったことを思いだしたもんだから」

「今すぐでなくてもよかろう。工藤さんに話があるのなら、仕事が終ってからゆっくり行けばいいさ。そこにきとるお棺を焼けば、今日の仕事はもうなかとだから、後は何をしようとあんたの勝手。……」

山東治がそこまでいった時、川岸の方角にトラックの走る音がきこえ、それをきっかけにするように、宰川美雄はじりじりと後退すると、いきなり身を翻した。

「宰川さん、待ちなさい」

彼は振りむきもせず、あっという間に火葬場裏の土手を駈け上った。取り返しのつかぬことになったと思う反面、幾分か安堵する心の入りまじった奇妙な気分のまま、山東治は広場に戻った。案の定、肥って背の低い民生委員がせかせかした足どりで近寄ってきた。

「物見遊山にきとるんじゃないからね。てきぱきやってくれんと困るよ」

「焼却係が出て行きよったんですよ」山東治はつとめてあっさりといった。「用事を思いだしたというんです。仕事を終えてから行けというたんですが、きき入れもしよらんし、どうにもなりやしません」

民生委員は一瞬、近眼のような目つきで山東治を見た。それから半分程開いた唇を顫わせて「出て行きよったって、何をほざく」といった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「今見とられたならわかったでしょう。いくら止めてもきかずに行ってしもうたんです。咲子に話したいことがあるというとりました。咲子というのは以前宰川さんの奥さんだった人ですよ」
「わかっとるよ、そんなことは」民生委員はいまいましそうな声をだした。「この町で知らん者はなかろう。誰でもあの男のことは知っとる。そうじゃないか」
「そうですね」山東治はいった。
「そうですね、だと。火葬場の事務員にしちゃ、あんた、えらいゆっくり構えとるが、あんたがみんな責任を持つというのなら、それでもかまわんよ」
「ゆっくりとは構えとりませんよ」山東治は相手の言葉をひとつずつ返した。「いくら火葬場の事務員だというても、焼却係の首に縄つけとくわけにもいかんし、責任持てといわれても責任の持ちようがない。第一、わたしにそんな権限はないでしょう」
「理屈いうてすむ問題じゃなかろう。こっちは暑い最中に、こうやって自分とつながりもないお棺を運んできとるんだからね。かんじんな時にお棺を焼けんような火葬場なら、高い経費かけておいとくこともない」民生委員は自分の金でもだしているような口調で威した。
「宰川さんが出て行くのをあなたも見とったでしょう。わたしが止めるのを振り切って行ったとだから、こりゃどうしようもない。お棺も焼けんような火葬場といわれても、どんなふうに答えたらいいのか、こりゃ困ってしまう」
民生委員は舌打ちした。すると棺を担いだ男たちともうひとりの男がやってきて山東治を囲んだ。
「ぐずぐずしとったら、仏さんはお棺の中で煮えてしまうよ」半ズボンの下の膝にうす汚れた包

帯を巻き、地下足袋をはいた男がいった。
棺を担いだ男のひとりは、山東治に味方するような按配にくすくすと笑った。「どうしたんだね、一体」
「焼却係が逃げだしたんだよ。いや、逃げだしたわけじゃないが、用事があるからといって、おらんようになってしもうたんだ」
「逃げだしたわけじゃないと」民生委員は高い声をだした。「逃げだしたにきまっとるじゃないか。薄のろに用事なんかあるはずがない。お情けでおいてもろうとる火葬場要員のくせに、それとも何か、あんたはあいつの肩を持とうというんか」
「肩なんか持ちませんよ。わたしはただ、宰川さんからきいたことを伝えとるだけです。宰川さんは奥さんに話したいことがあるので、それで出かけるんだと……」
民生委員は頭を振りながら、同時に片手で相手の言葉を払い除けるようなしぐさをした。
「あの男に現在、奥さんと名のつくものがおるのかね。そんなことをいうとったら、あんたまでおかしな目で見られなければならんことになるよ。薄のろと工藤の細君との関係を知らんというわけでもあるまいに、ちょっと知らんふりをしすぎはせんか」
「お棺を焼く人間が逃げだしちゃ仕様ないな」棺を担いだ男がどっちともつかぬことをいうと、肘のあたりを掻いた。
「今は他人の奥さんでも、元々あの人の女房だったんだから、宰川さんが話したいというのは仕方がないでしょう」
「へっ」巾の広い縦縞のネクタイをした民生委員は咽喉の奥であなどったような声を発した。

「あんたも妙な肩入れをするもんだ。薄のろにどんなやり方で吹き込まれとったかしらんが、元元あの男の細君だったなんていわれると、何か筋道の通ったような話にきこえるからねえ」

山東治はそれまで黙っている男が、素早い動作で足下の夏草に止まったきりごまとんぼを手でつかむのを見た。さっきその男が躓いたので宰川美雄は笑ったのだ。

「わたしのいうことをきかれんのか」

「何をですか」山東治はいった。掌の中できりごまとんぼの羽が顫えている。

「そういうあんたの顔だよ。人の言葉をまともにききもせず、とぼけた面して、女房だったからどうのこうのと、今更芸もない話を持ちだすあんたの魂胆がわたしにはわからん」民生委員はいった。

「わたしはありのままを伝えとるだけです。奥さんと話したいことがあるといって宰川さんは出て行った。わたしはそういうとるんだから、魂胆がどうとかこうとかいわれてもようわかりません」

「あーあ、わからんというならわからんでもいいさ」民生委員は顔に似つかわしくない小さいタオルを上衣のポケットからだして首筋を拭いた。「どっちみちこのままじゃすむまいからな。火葬場の事務員が隠亡に肩入れして、お棺を焼くわけにいかんという話がどこの世界にある」

「焼かんとはいうとりませんよ」

「それじゃ、あんたが焼くか」

「係りでもない者が焼くわけにはいかんでしょう。焼却係がいないので、今焼くことはできない。わたしはそういうとるんです」山東治はいった。

川岸の方角に、ふたたびトラックの走る響きがどろんどろんというふうにきこえ、膝に包帯を巻いた男がわざとらしく眉をしかめた。
「昨日、今日じゃない。先一昨日の仏さんだから、焼くとか焼かんとか、悠長なことはいうとられんよ」
民生委員は桃色のタオルで口許を拭き、それからもう一度首筋のあたりを拭くと、山東治の胸に指をつきつけた。
「火葬場の事務員なら事務員らしゅうしてもらおうか。いつまでもらちのない話をしとるわけにはいかんからね」
「事務員らしゅうするって、何をするんですか」
民生委員は声にならぬ呻きのような呟きを二、三度繰返した。そして突然こみ上げてきた怒りのために、逆に余裕を示そうとして、妙な言葉使いをした。
「要するに何だね、火葬場としては……火葬場の事務員としてはお棺を受付けられない。なぜかといえば焼却係がいないからだ。わたし達の運んできたお棺を勝手に打棄って、あの男が出て行ったことについては、何の責任も持ちたくない。それで……あんたはそういうつもりなんだね」
「違いますよ」山東治はすぐ言葉を返した。「お棺を受付けられないとはいうとりません」
「理屈はいいよ、もう。揃いも揃って、町役場もまあ、大した人間を雇うとるもんだ。二十年間、阿呆みたいにひとつことばかりいうとる人間と、何でもいいからたてつきさえすればいいと思うとる者と。これじゃ安心して棺桶にも入れんことになる」

きりごまとんぼをつかんでいる男が無表情のまま掌を開くと、まるで毛虫のような黒い塊りになって、とんぼはぽとりと地面に落ちた。もうひとりの棺を担いだ男はうれしそうな目つきをして、ひねりつぶされたきりごまとんぼを見ていたが、山東治の方を向くと「死人を焼くっていうのは、そんなに難しいもんかね」といった。

「そりゃ、誰にもできるっていうもんじゃないよ」地下足袋をはいた男がそれを受けて、片方の手で自分の肘のあたりをぴしゃぴしゃと叩いた。「火葬場で焼いたわけじゃないが、落盤で死んだ男の手だけを焼いたことがあるんだ。包丁のごたる岩の下敷きになって、ぐさっとやられとったとよ。本当は胴体と一緒に火葬場に持って行かねばならんのかもしれんが、誰がいいだしよったか、そのばらばらになってぐしゃっとなっとる手だけの葬式をやろうという者がおったんだ。それで、ボタ山のガス鼻に持って行った。あそこなら臭いも気にならんやろうというわけ。ところがどうして、手首一本そう簡単に灰にはならん。コークス燃やしてのせたんじゃ人間の焼鳥みたいなことになって、気色もわるいし、あんまり簡単すぎるから、割った坑木を組合わせて、その中で焼いたとよ。初めのうちは、こりゃ坑夫葬みたいやから、火葬場なんかよりよっぽどいいぞというとった連中も、手首があんまり焼けんので、まだ生血が残っとるから焼けんのじゃないかとか、坑木の中だからかえって魂が迷うとるのかもしれんといいだす者もおって、しまいには仲間うち喧嘩のごとなったけんねえ。……」

「そりゃ何処の話」

「ありゃ、何時頃だったかなあ」膝に包帯をした男はきき違えた。「ぼつぼつ閉山の話もでとった頃だから、もう五年にもなるかねえ。……」

民生委員は桃色のタオルを苛だたしい手つきで握りしめながら、上ずった声をだして男たちの間にかわされようとする懐旧談を打切らせた。

「わたしを嘗めちゃいかんよ。嘗められるなら嘗めてもいいが、そんなふうに生きてはきとらんつもりだ。どういうつもりでわけのわからん態度にでとるかしらんが、あんまり度がすぎると、いわずにすむことまで、いわなければならんようになるよ」

山東治は二、三歩前に進んで、地面のきりごまとんぼをズックの底で踏みにじった。それから小指の爪で前歯のつけ根をこすった後、民生委員の顔を正面から見下ろした。

「いわずにすむことって何かな。そんなものがあるんなら、きかせてもらいたいもんですね」

「いえというならいうさ。火葬場要員にいつまでも嘗めた真似されたんじゃ、役場の者にだってしめしがつかんよ」民生委員はいった。

山東治はわざとらしく口を開いて、重たい空気を吸い込んだ。そして挑発するような口調で

「勿体ぶらずにきかせてくれませんか。その、いわなければならんようなことっていうのを」

「勿体ぶらずにというたな」民生委員は口を顫わせた。

「人の手前、黙っておこうと思うとったが、そんなつもりならいうてやろうか。物月の廃船場に住んどる女のことでどんな噂が流れとるか、あんたも知らんわけじゃなかろう」

「ああ、あの色きちがいの親娘」山東治はこともなげにいった。「どんな噂が流れとるのか、ついでにそれもきかせてもらいたかね」

「しらを切るつもりならそれでもいいが、いつまでそれがつづくか」

「どんな噂が流れとるのかときいとるんですよ。物月に住んでる色きちがいの親娘がどうしたと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com